

## 小・中学校社会科研究部

### I 研究主題

『児童・生徒が主体的に学び、思考力・判断力・表現力を伸ばす社会科学習指導』  
～小・中を見通した判定基準の設定～

### II 主題設定の理由

本研究部は昨年度まで中学校社会科研究部として活動を進めてきた。本年度より、小中の連携、接続を進めながら新たに、小・中社会科研究部として発足した。

昨年度までの研究では授業における「思考力・判断力・表現力」の育成に視点を当てて、「授業改善」に取り組み『生徒が主体的に学び、思考力・判断力・表現力を伸ばす社会科学習指導』と主題を設定し研究を進めていた。

「思考力・判断力・表現力」の育成が叫ばれる昨今において、思考力を見取る指標（判定基準）が明確でないため、「「思考力・判断力」とは「何を」「どのように」考えれば身に付いたと言えるのであろうか？」と言った考えから、児童・生徒の新聞、ノート、ワークなどを評価する際に、「丁寧にまとめている。」「たくさん書いている。」「なんとなく目標に達していそう。」と美しさや量、勘で判断しがちである。

そのため、学習指導要領に示す内容が一人一人に確実に身に付いているかどうか適切に評価するため、児童に「何を」「どのように」思考・判断させれば、児童に「思考力・判断力」が身に付いたと言えるのか、そのための判定基準を設定することが重要と考えた。

本研究部では昨年度の研究も生かしていき、児童・生徒の「思考力・判断力・表現力」の育成も進めながら、設定した判定基準を元に評価の低い児童・生徒をどのように上の評価に上げていくのか手立てを考えていかなければならないと考え、本主題を設定した。

また、小・中のつながりを考えたときに「小学校の「A：十分満足できる。」の評価は中学校ではどのレベルを言うものなのか。」「小学校から中学校に送る際にどの程度までの考え方を身に付ければいいのか。」ということ踏まえながら研究に取り組んだ。

### III 研究の内容

#### 1 研究の仮説

判定基準を活用した授業実践を通し、児童・生徒一人一人を適切に評価し、指導助言を行うことができれば、「思考力・判断力・表現力」を確実に身に付けることができるだろう。

#### 2 研究の取り組み

##### (1) 小・中学校を見通した授業づくり

小・中のつながりを考え、課題設定を行った。

##### ①小中学校の評価の観点の趣旨の違いを整理する

小中の「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（国立教育政策研究所著）」をもとに、各校種の思考力・判断力・表現力の評価の観点の趣旨を比較し違いを明確にする。（表1）

②小・中学校を見通した教材設定

本研究において、小・中が共通した単元では小学校（小6）では6～7月、中学校（中1）では12～1月に鎌倉時代を取り上げるため、共通に研究できる教材として「元寇」を設定する。

③思考力・判断力・表現力を育てる課題づくり

表1を生かして、小・中学校のつながりを考え課題づくりを進める。

(2) 授業において、児童・生徒に思考・判断させ表現する場面をつくる。

授業の中で児童・生徒が思考し判断できるように工夫をする。

①ワークシートの工夫

小学校においては、発達段階を考え2枚の絵を元に比較し、その違いについて考えられるようにする。

中学校においては、生徒が思考・判断するための参考となる資料を多く提示するとともに、判定基準を明示することで、生徒自身が思考・判断・表現を意識して学習に取り組めるようにする。

②判定基準の設定

表1を元に判定基準を設定することで、児童・生徒に書き込ませたい内容を明確化し発問や指導、助言につなげる。

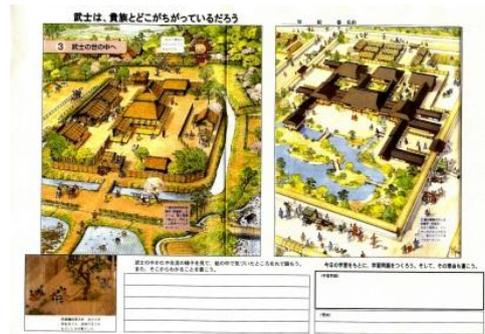
(3) 児童・生徒が書いた作品（ノート、ワークシート、新聞等）を分析し、指導に生かす。判定基準を生かし、児童・生徒の作品を評価、分析する。

①児童・生徒の作品から思考力・判断力・表現力をより伸ばせる指導の工夫

B評価「おおむね満足できる」に至らないと判定された児童・生徒に対して判定基準から、考え方についての指導助言を行う。同様にB評価「おおむね満足できる」と評価された児童・生徒をA評価「十分満足できる」に、また小学校において、A評価の児童へは中学校に向けた指導・助言を行う。（詳細は実践例を参照）

小中学校の評価の観点の趣旨の違い		
	小6	中・歴史
	我が国の歴史に関する社会的	歴史的
問題・課題の特質と引き出し方	事象から	
どのような問題や課題に直面させるか	学習問題	課題
	を見いだし	
	追究し	
思考の対象と様相	社会的事象の意味	我が国の歴史の大きな流れや 各時代の特色など
直面した問題や課題を解決するためにどのように思考するか	について(を)	
	より広い視野から	多面的・多角的に
判断の視点や用いられる情報と様相	思考・判断したことを	考察し
直面した問題や課題を解決するために何をどのように判断するか		公正に判断して
求める表現		その課程や結果を
思考・判断を働かせて問題や課題を解決した課程や結果を表現	適切に表現している。	

表1



## IV 実践例①

〈所沢市立上新井小学校第6学年の事例〉

### 1 小单元名 武士の世の中へ

### 2 小单元について

#### (1) 教材観

本小单元は、小学校学習指導要領第6学年の目標(1)、(3)及び内容(1)のウに基づいて設定したものである。源平の戦い、鎌倉幕府の始まり、元との戦いについて調べ、武士による政治が始まったことが分かるようにすることを主なねらいとしている。

#### (2) 児童の実態

5年生までは社会科の学習にあまり興味をもてなかったが、6年生になり、歴史学習には興味をもって取り組んでいるという児童が多い。これまでの学習では、複数の資料を関連づけてみたり、現在の自分の生活と比較したり、もし自分がその当時に暮らしていたらどうしていたかなどを考えたりするような活動に取り組んできている。

#### (3) 研究主題との関わり

児童生徒が主体的に学び、思考力・判断力・表現力を伸ばす社会科学習指導  
～小中を見通した判定基準の設定～

社会科において、児童が主体的に学習を進めるためには、どのように問題意識をもたせるかが重要だと考えている。特に児童の生活と時間的にかけ離れている歴史の学習においては、資料を通して一人ひとりの児童がその時代に身を置いて考え、判断し、表現することができるような学習活動を展開する必要がある。

本小单元では、絵画資料を扱い、当時の人々が体験した時代の移り変わりを追体験させることにより、自分なりの考えを表現し、友達と交流し合う中で、歴史を見る目を育てていきたい。

また、元寇は日本の歴史上、初めて外国から攻め込まれた出来事だが、その取扱いについて、学習指導要領解説では、それぞれ次のように触れられている。

【小学校】「元との戦い」について調べるとは、例えば、北条時宗が全国の武士を動員して元の攻撃を退けたことなどを取り上げて調べ、幕府が全国的に力をもってきたことが分かるようにすることである。

【中学校】「東アジアの国際関係」については、「元寇、日明貿易、琉球の国際的な役割などを取り扱う」ようにし、この時代の東アジア世界との密接なかわりや、それが国内に及ぼした影響などに気付かせる。

これを受け、本小单元の指導については、元寇を幕府の統制が強まるきっかけとしてとらえるなかで、将軍と御家人の主従関係の崩壊したことや近隣東アジア諸国との関わりにも意識を向けられるようにして、中学校での学習につなげたい。

### 3 小单元の目標と評価規準

#### (1) 小单元の目標

武士のくらし、源平の戦い、鎌倉幕府の始まり、元との戦いとそれらにかかわる人物の働きや代表的な文化遺産を通して、武士による政治が始まったことが分かるとともに、それらにかかわる人物の願いや働き、代表的な文化遺産の意味を考えようとする。

#### (2) 小单元の評価規準

社会的事象への 関心・意欲・態度	社会的な 思考・判断・表現	観察・資料活用の 技能	社会的事象についての 知識・理解
武士の暮らし、源平の戦い、鎌倉幕府の始まり、元との戦いとそれらにかかわる人物の働きや代表的な文化遺産に関心をもち、進んで調べようとしている。	武士の暮らし、源平の戦い、鎌倉幕府の始まり、元との戦いについて、学習問題や予想を考え表現するとともに、源頼朝の働きや武士の政治の仕組みについて、調べたことを比較したり関連付けたりして、考えたことを適切に表現している。	武士の暮らし、源平の戦い、鎌倉幕府の始まり、元との戦いとそれらにかかわる人物の働きや代表的な文化遺産について、文化財、地図や年表、その他の資料を活用して必要な情報を集めて読み取り、ノートや作品にまとめている。	武士による政治が始まったこと、源頼朝が幕府を開き、武士がより大きな力をもつようになったこと、元との戦いが鎌倉幕府の全国支配に大きな影響を及ぼしたことなどが分かっている。

#### 4 小単元の指導計画と評価規準

過程	時	学習活動・学習内容	評価規準
つかむ	1	武士のやかたの様子（想像図）を見て、武士の生活の様子、武士と貴族の違いなどについて、気付いたことを話し合い、学習問題をつくる。学習問題 武士はどのようにして生まれ、700年も世の中をおさめる力をつけていったのだろう。	<b>関</b> 武士の生活の様子、武士と貴族との違い、武士の思いや願いについて関心をもち、学習問題を考え表現している。
	2	平清盛を中心とした平氏の活動、平氏による武士の政治の始まりについて調べる。	<b>技</b> 絵図や年表などの資料を活用して調べ、武士が力をつけて政治を動かすようになっていったことを読み取ってまとめている。
調べる	3	源平合戦の様子や頼朝が鎌倉に幕府を開くまでの経過について調べる。	<b>思</b> 源平の戦いで源氏が平氏に勝利した理由を考え、多くの武士の協力があつたことを表現している。
	4	鎌倉の地図やご恩と奉公の関係図、雅子の訴えなどをもとに鎌倉幕府の特色について調べる。	<b>知</b> 鎌倉幕府がご恩と奉公の関係で武士たちを従えたことや、朝廷の軍を破って、その力が西国にまで及ぶようになったことがわかっている。
まとめる	⑤	本時の展開参照	
	6	学習したことを年表にまとめ、関係する人物のせりふを考える	<b>思</b> 学習した出来事と人物の願いや働きを相互に関連づけて振り返り、年表やせりふに表現している。

## 5 本時の学習（5／6時）

### （1）本時の目標

元との戦いについて資料をもとに調べ、幕府と武士の結びつきの変化をとらえる。

（思考・判断・表現）

### （2）本時の展開

学習活動・学習内容	指導上の留意点・評価	資料	時間
1 前時の学習を振り返る。 ・領地を認めてもらうために、武士は武芸に励んだ。 ・「ご恩と奉公」の関係があった。	・「ご恩と奉公」の関係を視覚的に示すようにする。	・主従関係の図	4
2 本時の課題を確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">元との戦いは日本にどのような影響を与えたのだろう</div> 	・元と日本の位置関係や面積の違いを、地図で確認する。 ・自分が執権の立場だったら、国書をもってどうしたか考えさせる。 ・歴史漫画を使って、元と幕府のやり取りをとらえさせる。	・アジアの地図 ・元からの国書 ・歴史漫画	5
3 元との戦いの様子を調べる。 ・多くの武士が戦いに参加した。 ・領地をもらうために、一所懸命に戦った。 ・元の戦法に苦戦したが、勇敢に戦った。	・双方の戦い方が対比できるように、整理して板書する。 <b>技</b> 資料から、日本と元の戦い方の違いを読み取っている。（発言・ノート） ・『蒙古襲来絵詞』は加筆された部分があるという説を紹介し、次の活動につなげる。	・『蒙古襲来絵詞』 ・『蒙古襲来絵詞』の加筆とされる部分を消したもの	15
4 元との戦いの後の様子を調べる。 ・武士は十分な「ご恩」を受けることができなかった。	・竹崎季長がどんな思いで自分の活躍を絵詞に残したのかを考えさせる。 	・『蒙古襲来絵詞』	10
5 元との戦いが日本に与えた影響を考える。 ・幕府への信頼がなくなった。 ・外国のことを考えた国づくり	・本時の学習内容をふまえて考えさせるようにする。 <b>思</b> 元との戦いの後、「ご恩と奉公」の関係がどのように変わっていったかを考え、		10

が必要になった。	表現している。(ノート)		
6 本時の学習をまとめる。			1

(3) 判定基準 (視野、思考・判断、表現) と指導助言の例

**A : 十分に満足できる児童の状況**

幕府と武士 (御家人) 双方に目を向けて、  
幕府が減じた理由 (ご恩と奉公の関係の変化) を考え、  
適切に表現できる。

**児童の回答**

- ・ 武士はいかり、うったえていて、幕府はあげたくてもあげられない状況なので、ご恩と奉公で築きあげた関係がくずれた。
- ・ 鎌倉幕府の力が弱くなって政治の中心が変わる。ご恩と奉公の関係がくずれる。協力する武士がいなくなる。

**B : おおむね満足できる児童の状況**

幕府と武士 (御家人) どちらかに目を向けて、

→ご恩と奉公の関係から両者に目を向けさせ考えさせる。

幕府が減じた理由を考え、

→ご恩と奉公の関係から両方の理由を考えさせる。

適切に表現できる。

**児童の回答**

- ・ 武士と幕府は関係が悪くなっていく？
- ・ 武士が反乱を起こした。幕府への協力をやめた。従わなくなった。
- ・ 日本同士で争いが起きたと思う。
- ・ 鎌倉幕府の力が弱くなっていく。中心が変わっていく。

**C : Bに至らない児童の状況**

幕府にも、武士 (御家人) にも目を向けられず、

→幕府と武士 (御家人) の関係に目を向けさせ考えさせる。

幕府が減じた理由を考えられず、

→幕府が力を付けた理由か幕府が減じた理由を考えさせる。

適切に表現できない。

→書き方の例や書き出しの言葉を示す。

**児童の回答**

- ・ あいさつをしないで争いを始めるようになった。
- ・ 武士がいなくなる。
- ・ 無記述

## 実践例②

〈所沢市立東中学校第1学年の事例〉

### 1 単元名 第3章 中世の日本 ～東アジア世界とのかかわりと社会の変動～

#### 2 単元について

##### (1) 教材観

本単元で扱う内容は、学習指導要領の「(3) 中世の日本」に位置付けられている。鎌倉幕府の成立、南北朝の争乱と室町幕府、東アジアの国際関係、応仁の乱後の社会的な変動などを通して、武家政治の特色を考えさせ、武士が台頭して武家政治が成立し、その支配が次第に全国に広まるとともに、東アジア世界との密接なかかわりがみられたことを理解させることを主なねらいとしている。

また、本時は「東アジア世界とのかかわりと社会の変動」の中で最初の学習である。今後、南北朝の動乱や室町幕府との東アジアとの交流などを学習していく中で、モンゴル襲来が幕府にどのような影響を与えたかを学習することをねらいとする。また、小学校との違いは、多面的・多角的に学習することである。幕府やそれに仕える御家人などのそれぞれの立場の違いを意識して学習を進めていく必要がある。

##### (2) 生徒の実態

事前調査では、社会科を好きな生徒は15名で、嫌いな生徒は16名だった。得意な分野は、地理分野と答える生徒が一番多く、苦手分野は歴史と答える生徒が一番多かった。普段の授業の様子は、全体的に意欲的に取り組んでいる。しかし、定期テストの結果から基礎学力の定着に課題があることが分かった。家庭での復習やワークなどの問題演習に取り組むことを苦手とする生徒が多い。

この現状を踏まえ、生徒の社会科に対する関心をより高めていくことが必要である。そのためには、課題解決能力を高めることであり、課題を解決する思考力・判断力・表現力を伸ばすことが必要とされる。

##### (3) 研究主題との関わり

児童生徒が主体的に学び、思考力・判断力・表現力を伸ばす社会科学学習指導  
～小中を見通した判定基準の設定～

中学校の判定基準は、『我が国の歴史の大きな流れや各時代の特色などを踏まえ、多面的・多角的に考察し、適切に判断して、その過程や結果を適切に表現すること』が求められる。それに対して、小学校は『社会的事象の意味について、より広い視野から思考・判断したことを適切に表現すること』が求められる。

中学校で行われる評価は、客観テスト（定期テスト等）によるものが主流となっているが、知識・理解は判断できたとしても思考・判断などの評価は難しい。しかし、具体的な判定基準を設けることで、子どもたちが自分の思考力・判断力・表現力を自覚し、より高い次元を目指し意欲的に学ぶことができる。

思考・判断を評価するためには、記述する必要がある。50分の授業の中で、どこで記述型の

発問をするかを設定するかが難しい課題である。ここで考慮したいことは、中学校と小学校での歴史的学習における知識・理解の学習量の違いである。新学習指導要領の教科書では、じっくりと記述する時間を取ることは大変難しい。どこか1つの単元で、じっくり思考力を伸ばす授業展開も考えられる。

しかし、昨年度の研究を踏まえ、1つの単元での思考力の向上よりも、毎時間実践できるような「考える発問の工夫」を考え、その発問に対して、判定基準を作成し、より確実に思考力・判断力・表現力を伸ばすことが重要であると考え、授業展開を工夫した。

### 3 単元の目標と評価規準

#### (1) 小単元の目標

東アジア世界とのかかわりに関心を持ち、モンゴルの襲来、日明貿易、琉球の国際的役割に関する様々な資料を活用しながら、鎌倉幕府の滅亡から戦国大名の登場までの武家社会の展開を理解し、そのかかわりが中世の日本に及ぼした影響を考える。

#### (2) 小単元の評価規準

社会的事象への 関心・意欲・態度	社会的な 思考・判断・表現	資料活用 の技能	社会的事象について の 知識・理解
モンゴルの襲来、日明貿易、琉球の国際的役割など、東アジア世界とのつながりに関心を高め、意欲的に学習している。	モンゴルの襲来や日明貿易が日本の政治や社会に与えた影響について、多面的・多角的に考察している。	武家社会の展開と社会の変化に関する様々な資料を活用している。	東アジア世界とのかかわりを背景に、鎌倉幕府の滅亡から戦国大名の登場までの武家社会の展開を理解している。

### 4 小単元の指導計画

時	学習活動・学習内容	評価規準
①	本時の展開参照	
2	○南北朝の動乱	<p><b>思</b>建武の新政から南北朝の動乱に至る経過や、動乱がもたらした武家社会の変化を考察している。</p> <p><b>知</b>新たな権限を持った守護が守護大名となり、後の政治に影響を及ぼすことに気付いている。</p>
3	○東アジアとの交流	<p><b>技</b>日明貿易、琉球の国際的役割、蝦夷地の動きなどを地図にまとめている。</p> <p><b>知</b>琉球が中継貿易に活躍し、中国・朝鮮・東南アジアを結びついていたことに気付いている。</p>
4	○産業の発達と民衆の生活	<p><b>思</b>農業や商業・手工業の発達が当時の社会に及ぼした影響について考察している。</p>

		<p>技村のおきてや一揆の碑文などの資料から、民衆の成長の様子を読み取っている。</p>
5	○応仁の乱と戦国大名	<p>関自分たちが住む地域の戦国大名に関心を持ち、意欲的に学習している。</p> <p>技戦国大名の分布図から、下剋上の風潮が全国に広がったことを読み取っている。</p>
6	○室町文化とその広がり	<p>関伝統文化に関心を持ち、室町時代に生まれた文化で現代に引き継がれているものだと気付いている。</p> <p>知武家文化と公家文化の融合など、室町時代の文化の特色をとらえている。</p>

## 5 本時の学習指導

### (1) 本時の目標

モンゴルの襲来が国内の政治に及ぼした影響を、御家人の動きから考察している。

(思考・判断・表現)

### (2) 本時の展開 (1/6時)

学習活動・内容	指導上の留意点・評価	資料	時間
<p>1 小学校までの学習事項を振り返る。</p> <p>・モンゴル襲来に関する寸劇を行う。</p>	<p>・既習事項である蒙古襲来絵詞の図を掲示する。</p> <p>・二度の襲来とモンゴル帝国が日本を襲来した結果を理解し、意欲的に劇に取り組み、興味をもてるようにする。</p>	<p>・寸劇の原稿</p> <p>・蒙古襲来絵詞の図</p> 	7
<p>2 学習課題の提示</p>			3
<p><b>学習課題</b></p> <p>モンゴルの襲来は、人々にどのような影響を与えたのだろうか。</p>			
<p>3 モンゴル帝国の拡大と二度の襲来について調べる。</p>	<p><b>学習内容①</b> モンゴルの襲来は、どのようなものだったのだろうか。</p>		10

	<ul style="list-style-type: none"> <li>ワークシートを配布し、教科書を用いて調べる。</li> </ul>	<p>ワークシート</p> 	
<p>4 鎌倉幕府の滅亡について調べる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>徳政令によって、御家人（武士）の借金がなくなった。</li> <li>徳政令は社会全体に混乱をもたらした。</li> <li>領地の分割相続により、御家人の生活が苦しくなった。</li> </ul>	<p style="text-align: center;"><b>学習内容②</b>モンゴルの襲来後、御恩と奉公が崩れた幕府は、何も手を打たなかったのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>モンゴル襲来後の幕府の対応と御家人の生活の変化について調べて、考察しワークシートに記入する。</li> </ul>	<p>ワークシート</p> 	<p>1 5</p>
<p>5 モンゴルの襲来が国内の政治に及ぼした影響を、御家人の動きから考察して本時の学習をまとめる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>本時の学習をふまえてワークシートに、モンゴルの襲来が、人々にどのような影響を与えたのか考え記入する。</li> </ul> <p><b>思</b>モンゴルの襲来が国内の政治に及ぼした影響を、御家人の動きから小学校での学習や様々な資料を基に、<u>多面的・多角的</u>に表現できている</p>	<p>ワークシート</p> 	<p>1 5</p>

(3) 判定基準 (視野、思考・判断、表現) と指導助言の例

「モンゴルの襲来が、人々にどのような影響を与えたのか。」

【判定基準 (◇思考)】

小学校での学習や様々な資料を基に、モンゴルの襲来の影響を多面的・多角的に表現できている。

【「十分満足できる」状況 (A) と判断した生徒の記述内容】

幕府と御家人や様々な立場に触れ、領地の分割相続の問題、徳政令の影響と御恩と奉公の関係について適切に表現できている。

例

幕府は、外国である元との戦いで新たな領地を獲得したわけではないので、奉公した武士に領地をあげられず、御恩と奉公の関係を崩すこととなる。

また、武士(御家人)は、二度の元寇における多大な犠牲と出費で負担が多く、御恩(恩賞)も不十分であったため、領地の分割相続によって、生活も苦しくなり、幕府への不満が高まった。

それに対して、幕府は徳政令を出して対応したが、金貸しや商人は、借金が帳消しになることで、金を貸すことをためらうようになったと考えられる。また、御家人の生活が苦しくなったことによって、支配されていた農民の生活も苦しくなったことが考えられる。

【「おおむね満足できる」状況 (B) と判断できる生徒の記述内容】

幕府と御家人の双方の立場に立ち、領地の分割相続の問題、徳政令の影響と御恩と奉公の関係について、適切に表現している。

例

幕府は、外国である元との戦いで新たな領地を獲得したわけではないので、奉公した武士に領地をあげられず、御恩と奉公の関係を崩すこととなる。

また、武士(御家人)は、二度の元寇における多大な犠牲と出費で負担が多く、御恩(恩賞)も不十分であったため、領地の分割相続によって、生活も苦しくなり、幕府への不満が高まった。それに対して、幕府は徳政令を出して対応したが、社会全体を混乱させることとなった。

\* (B) と判断できる生徒への手立て…農民や金貸し、商人などの立場を考えさせる。

【「Bに至らない」状況 (C) と判断できる生徒の記述内容】

幕府と御家人の立場に触れ、御恩と奉公の関係について表現している。

\* (C) と判断できる生徒への手立て…領地の分割相続の問題、徳政令の影響について考えさせる。

【D : いずれにも該当しない生徒】

\* (D) と判断できる生徒への手立て…まずは、幕府や御家人の立場に立てるように考えさせる。

## V まとめと課題

本研究では「歴史学習」において小学校で1事例、中学校で1事例に取り組んだ。双方の授業とも小中の連携、接続を研究の視点として判定基準を活用した授業実践を図ることができた。特に「思考力・判断力」の判定基準を設定し、評価の低い児童・生徒をどのように上の評価に上げていくのか手立てを考えることで、「思考力・判断力・表現力」の育成を図るため、「課題設定の仕方、指導・助言の工夫」を中心として実証授業に当たった。

本研究において小中の連携、接続を視点として、鎌倉時代末の「元寇」を取り上げ、学習課題を設定し、判定基準（表2）を設定することができた。判定基準の設定に当たり「小学校A評価は中学校のどの評価となるのか。」が課題となった。

- ・中学校は小学校の学習をベースとしていること。
- ・中学校では『広い視野』から『多面的・多角的』に思考の仕方が変化したこと。
- ・判断の仕方も『思考』から『考察』へ変化したこと。

これら3点等を踏まえて、小学校A評価を中学校C評価と考えた。

今後は1単位時間の連携ではなく、1小単元ずつ、小・中の連携を視点にこのような判定基準を設定していくことが望ましいと考える。しかし、本研究を進めるに当たり、小学校と中学校の歴史学習では、時代の区切り方に相違する部分があり、単元構成が小学校と中学校では違うことが分かってきた。本研究においても小学校では鎌倉時代末期、中学校では室町時代初期と時代が違っていた。このことから、歴史的分野全体、地理的分野全体等、社会科全体を通して、小・中学校の連携、接続を見通した判定基準を設定することが課題と考える。

表2

評価 (中学校)	中学校A 評価 「十分に満足できる」	中学校B 評価 「おおむね満足できる」	中学校C 評価 「Bに至らない」			
	学習課題	「モンゴルの襲来が、人々にどのような影響を与えたのだろう。」				
評価 (小学校)			小学校A 評価 「十分に満足できる」	小学校B 評価 「おおむね満足できる」	小学校C 評価 「Bに至らない」	
	学習課題	「元との戦いは日本にどのような影響を与えたのだろう。」				
判定基準	視野	幕府と御家人や様々な立場に触れ、	幕府と御家人双方の立場に立ち、	幕府と武士（御家人）双方に目を向けて、	幕府と武士（御家人）どちらかに目を向けて、	幕府にも武士（御家人）にも目を向けられず、
	思考・判断	領地の分割相続の問題、徳政令の影響と御恩と奉公の関係について、	領地の分割相続の問題、徳政令の影響と御恩と奉公の関係について、	幕府が減じた理由（ご恩と奉公の関係の変化）を考え、	幕府が減じた理由を考え	幕府が減じた理由を考えられず、
	表現	適切に表現できる。	適切に表現できる。	<小>適切に表現できる。 <中>表現できる。	適切に表現できる。	適切に表現できない。